

「サークルから消えた1年生」

廣谷泰斗(班長) 原田貴文(副班長) 谷口渚(記録) 平川沙和(接続) 松本太郎(渉外)

担当教員:甲斐田直子 TA:御手洗陽

【背景】

昨年度末から、コロナウイルスが私たちの生活に多大な変化をもたらした。それに伴い生活様式が劇的に変化し、社会活動に制限がかかるようになってしまった。このような社会的背景の中で大学もその形態を大きく変えなくてはならなかった。入学式の中止、課外活動の禁止、オンライン授業の導入などだ。高等学校などは緊急事態宣言が明けた直後から対面での授業が再開していたが、大学は今でもほとんどの授業がオンラインで行われている。このような状況のため、新入生は新たなコミュニティを形成する場として対面授業を利用することができず、他人との付き合いの機会が非常に減少した。

大学生活で他人とのかわりを持つ割合が大きいものの一つはサークル活動である。毎年、自分に合ったサークルを探す新入生と新入生を獲得しようとする団体との間で新入生歓迎会(以下新歓とする)が行われていた。しかし、今年度はコロナウイルスの影響で例年通りの新歓が行うことができなかった。そのため筑波大学含む多くの大学の団体では、例年通りの SNS 利用だけでなく Twitter などで実施することを告知した後、zoom などで疑似的に対面新歓を行うオンライン新歓が発生した。以下がメリットデメリットとして挙げられる。

○オンライン新歓のメリット

・一度の新歓でより多くの新入生に団体紹介ができる

・人出がかからない

・移動なしで新歓に参加できる

○オンライン新歓のデメリット

・聞き手からの反応が薄い

・新入生同士の交流がしにくい

・全体の雰囲気がかみにくい

・活動を正確に伝えにくい

【目的】

(1)コロナウイルス発生直後から先日までにかけて行われていた新歓の実態を調査し、コロナウイルス時代における新歓活動の新しい形を探り、最適解を示す。

(2)体験・対面接触をすることができない状況で新入生が自分に合ったサークルを見つける方法がないか探る。

(3)コロナウイルス感染拡大防止のために大学は様々な対応策を実施した。今後大学が実施する対策はどのようなものであれば学生のためになるかを考察する。

【調査概要】

本演習では、以下の4つの調査を行った。

1.SNSでの調査

対面での新歓活動が行えなかったため今年度はSNSを利用した新歓が活発に行われ、筑波大学では特にTwitterが利用されていた。

そのため新歓の活動実態を探るため各団体の公式Twitterを調査し、どのような活動を行っていたのかを時系列にまとめた。

2.サークルへのヒアリング調査

新歓を実施する側も昨年度までとは形態が大きく変化し、様々な悩みや問題があったと思われる。そ

のため全団体を「体育会部活」「体育会同好会」「芸術系サークル」「文科系サークル」「一般体育」「一般芸術」「一般文化」の7団体に分類し、ヒアリング調査を実施した。

3.学生生活課学生支援チームへのヒアリング

大学側は様々な対策を行っていた。その中には学生側の活動を大きく制限するものも少なくなかった。また、小中高校などとも制限の強さが異なっていた。そのため、大学側がどのような意図で対策を講じたのか、どのような事情があったのかを学生生活課にヒアリングし、意図を探る。

4.1,2年生へのアンケート調査

新入生及び学部2年生にサークルなどに入会する動機などについてアンケート調査を実施し、コロナウイルスによって団体・新歓の存在意義が変化し可能性についても調査する。

【調査結果】

1.2.。どの種の団体も4月に活動を停止しているが、それぞれ活動の再開時期と新歓開始時期に差が見られた。体育会部活動は新歓活動を行わなくても新入生が加入するため新歓を行っていなかった。また、体育会同好会は一般サークルと同様に新歓活動を行っていた。活動再開時期のずれの原因は体育専門学群の存在が大きいことも大学へのヒアリングから分かった。

3.学生生活課学生支援チームへのヒアリング

大学が課外活動再開に慎重になった理由は、大学では授業と課外活動は別物であり部活動などの体育会系・芸術系・文化系団体は大学の管轄となる一方で、一般サークルは学生が運営する団体となり、その活動に学生が責任をもつことになっている。そのため大学の対面授業で学生が指示に従って受講していたにもかかわらずクラスターが発生した場合、大学が責任をとることになるが、サークルでクラスターが発生した場合、そのサークルの学生が責任をとることになる。

大学は学生の感染を防ぐことだけを考えているのではなく、学生に友人と会う機会や友達を作る機会を作ってあげたいと考えながらも、クラスターが発生した場合や、それによって学生が誹謗中傷にさらされることを考えると安易な決定はできないというものだ。

最後に、オンライン新歓に対する大学の意見を聞いた。オンライン新歓については新入生にとって先輩や同級生と関わりを作ることが出来るいい機会として推奨する気持ちだったとのことだった。また、今後のオンライン新歓の可能性として、オンライン新歓の整備は大学ではなく全代会が主催して行っているものなので大学が主導して行うことはないが、要請があれば全力でサポートしたいとのことだった。

4.1,2年生へのアンケート調査

アンケート調査は調査分野の似ていた6班と合同で行った。アンケートで調査した概要は以下の通りである。

<1,2年生へのアンケート>

(目的)1,2年生間の加入率や加入のきっかけ、サークル・部活の団体活動への満足度の相違、新歓形態や新歓の内容の詳細を調査する。

(対象)筑波大1年生99名、2年生57名
 (有効回答数)99、57
 (方法)Microsoft Forms
 (実施日時)12/1~12/7

<部活・サークルへのアンケート>
 (目的)コロナ禍における部活・サークル活動の実態調査
 (対象)筑波大学の部活・サークル 43団体
 (有効回答数)42
 (方法)Microsoft Forms
 (実施日時)12/1~12/7

○加入状況について

・1, 2年生のサークル加入率

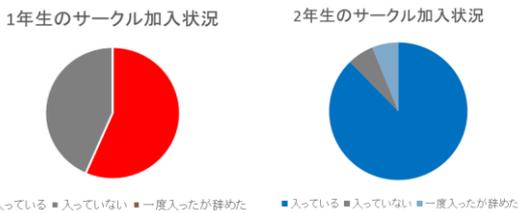


図1

図2

上に示したグラフはそれぞれ図1が1年生のサークル加入状況、図2が2年生のサークル加入状況である。1年生の加入率が57%であったのに対し、2年生の加入率が88%であり、1年生がサークル選別に乗り遅れていることがわかる。1年生のサークルに加入していない理由として、「入る時期がわからなかった」(25%)「雰囲気かわからなかったから」(20%)「課題が忙しかったから」(20%)と、コロナウイルスの感染拡大に伴う多くの規制に強く影響を受けていることが分かった。

・加入した団体を知った時期

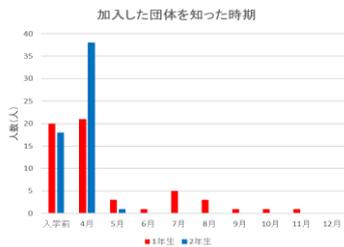


図3

図3は1, 2年生の加入した団体を認知した時期を月ごとに比較したグラフである。図3の入学前から4月にかけての1, 2年生を比較すると2年生が大きく数を伸ばしているのに対し、1年生はほぼ横ばいとなっている。これは、2年生は新歓祭での著効説教誘を受けていたために受動的でも部活・サークルの情報を得ることでサークルの存在を知ることができたのに対し、1年生は新歓祭をはじめとした新歓に関わる各種イベントの中止によって、SNSを調べるなど能動的に動かないとサークルの情報を得られない状況にあったためであるといえる。

・入部・入会を決めた時期

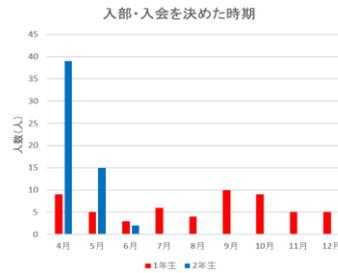


図4

図4は1, 2年生の団体への加入を決めた時期を月ごとに示したグラフである。2年生はほとんどが4, 5月に入会を決めていることがわかる。これは例年新歓が5月初旬に終了し、そこで入会の最終決定が求められるためであると考えられる。一方で活動の自粛により4, 5月に対面新歓が行われなかった今年は入会を決めるはっきりとした時期がなく、図4からもわかる通り1年生の入会は毎月起こっている。また、入学直後4月と活動再開直前の9月、活動再開直後の10月は入会者が多くなっている。

○加入の決め手・きっかけ

・きっかけの違い(コロナ機と例年の比較)

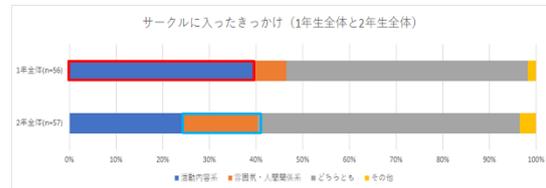


図5

図5は加入するきっかけを1, 2年生で比較したグラフである。図5より、1年生は活動内容で加入を決めた人が比較的多く、2年生は雰囲気・人間関係で選んだ人が比較的多いことが見て取れる。このことから、コロナ期は例年と比べてサークルの選び方に変化が起きていることがわかる。

・きっかけの違い(新歓方法による比較)

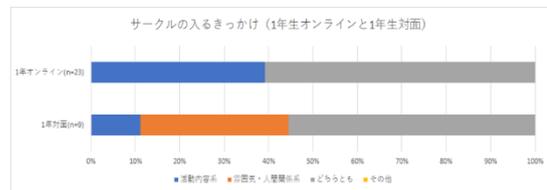


図6

図6は1年生の中でオンライン新歓に参加した人と対面新歓に参加した人の加入のきっかけを比較したグラフである。図6より、オンライン新歓に参加した人は活動内容を中心に加入する団体を決めていた一方で、対面新歓に参加した人は団体の雰囲気・人間関係を中心に加入する団体を決めていたことがわかる。このことから、新歓の形態によって加入のきっかけは異なることがわかる。また、対面新歓では団体の雰囲気が伝わりやすいのではないかとすることも感じた。

・1年生の加入の決め手

対面新歓での加入の決め手 ----- オンライン新歓での加入の決め手



図 7 図 8

図 7 は対面新歓で加入を決めた 1 年生の加入の決め手となった要素を示したグラフ、図 8 はオンライン新歓で加入を決めた 1 年生の加入の決め手となった要素を示したグラフである。図 7 より対面新歓では雰囲気・人間関係を見て選んでいる人が多く、図8よりオンライン新歓では活動内容や中高での経験の理由にサークルを決めている人が多かった。以上より新歓の方法によって、決め手が変わることが判明した

○満足度

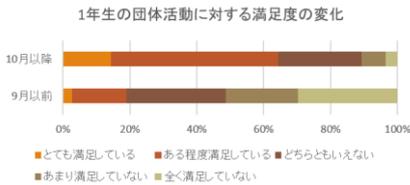


図 9

図 9 は 1 年生の 9 月以前の団体活動に対する満足度、10 月以降の団体活動に対する満足度をそれぞれ示したグラフである。この満足度の変化についてカイニ乗検定を行った。帰無仮説を 9 月、10 月の満足度はそれぞれ独立でない、つまり 9、10 月は同様の満足度であったと定義し、検定を行った。結果として $\chi^2=24.77$ $p<0.01$ が得られ、帰無仮説は棄却された。つまり、10 月以降において満足度に変化があったと結論づけられる。

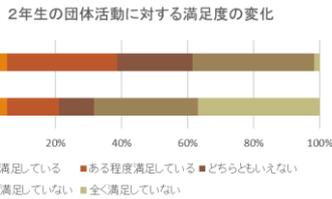


図 10

図 10 は 2 年生の満足度について示したグラフである。1 年生同様、この満足度の変化についてカイニ乗検定を行った。帰無仮説を 9 月、10 月の満足度はそれぞれ独立でない、つまり 9、10 月は同様の満足度であったと定義し、検定を行った。結果として $\chi^2=24.36$ $p<0.01$ が得られ、帰無仮説は棄却された。つまり、10 月以降において満足度に変化があったと結論づけられる。つまり、1、2 年生いずれも満足度に変化が生じていたといえる。よって活動に規制はあるものの団体活動が再開された結果、団体活動に対する満足度が向上したのではないかと考えた。

・加入の決め手別満足度

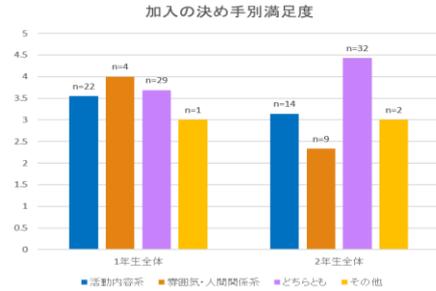


図 11

図 11 は加入の決め手別に満足度を比較した。2 年生全体の「活動内容系」、「どちらとも」について t 検定を行ったところ有意性が見られたため、活動内容だけでなく雰囲気・人間関係も見の方が満足度が高いと言える。オンラインでは見切ることのできなかった雰囲気などを見てサークルを選ぶことが満足度を向上させるために重要である。

- 1, 2 年生対象アンケートで判明したこと
- ✓1 年生は例年よりも部活・サークル加入率が低い
- ✓対面とオンラインで加入の決め手が異なる
- ✓活動内容だけでなく雰囲気を見ることも重要

○加入者数

・団体の構成人数と新入生人数の変化

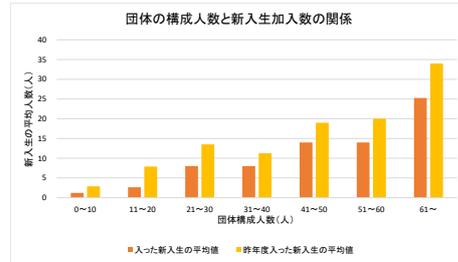


図 12

グラフから、例年同様、構成人数の多い団体には多くの 1 年生が加入していることがわかる。しかし、どのカテゴリも昨年度と比べると加入人数は減少している。このことから、部活・サークルの加入者数は全体的に減少しているといえる。

・オンライン新歓の効果

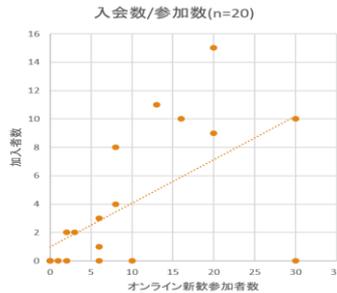


図 13

図はオンライン新歓に参加した人数と入会者数の相関を示したグラフである。この結果相関係数は

0.521, $p=9.84 \cdot 10^{-5} < 0.05$ となり、正の相関があることが分かった。つまり、オンライン新歓には新生に加入したいと思わせる効果がある、ということになる。オンライン新歓はコロナ渦で誕生した新たな新歓の形だが、コロナが終息しても続けていくべきである。

・対面で早期新歓を行った団体について

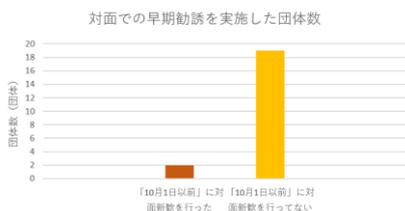


図14

アンケートで規制が緩和された 10/1 以前に対面新歓を行ったと答えた団体は 2 団体にとどまったが、予備調査で行った部活・サークルへのヒアリングではもっと多くの団体が早期新歓を行っていた。匿名ではあるものの、アンケートという媒体を通して事実を明かすことが躊躇われた可能性が考えられる。ただ、早期新歓を行っていた団体の中で感染者は出ることはなかった。それらの団体は感染対策の徹底、密を防ぐための団体独自のルールを作るなどの対策を行っていたという背景もあった。つまり、感染対策を徹底すればコロナ下でも対面新歓は取り入れることができるのではないか。ただし、その際は一部の団体の「抜け駆け」が起きないように全団体が足並みをそろえて公平性を保つことが重要である。

○部活・サークル対象アンケートで判明したこと

- ✓昨年度よりも少ないがオンライン中心の今年も 1 年生は一定数加入している
- ✓オンライン新歓は一定の効果がある
- ✓10 月以前に対面で新歓していた団体は存在していたが、感染者は確認されていない

【提案】

私たちはコロナ下における新しい新歓方法について以下の 3 つの提案を行う。

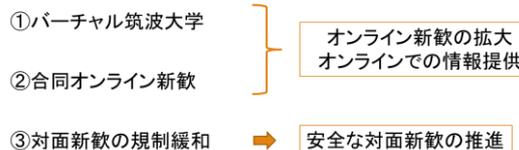
- ① バーチャル筑波大学
2020 年度東京大学のオープンキャンパスによって実施された「バーチャル東大」を参考にした。バーチャル筑波大学はバーチャル空間に筑波大学を再現するものである。有志の筑波大生を募り、モデルを作成してもらおう。クラスターというバーチャル SNS を利用して一年生に公開する。大学内を散策できるのみでなく、各所に部活・サークル団体の NPC を配置し、話しかけると各団体の紹介を見れるようにすることでコロナ下での実施が難しい例年のような新歓祭に近いものを体験でき、多くの部活サークルを知る方法を新生に提供できる。
- ② 合同オンライン新歓
これは様々な団体を一気に知れるオンライン新歓である。全体にてイベントの説明、各団体の紹介を行い、その後自分の気になる団体のオンライン新歓

に参加するという流れで新生をオンライン上で誘導する。各団体の新歓委員から新生を案内する運営委員を招集することで運営を行う。1 年生はより多くの団体を知ることができ、オンライン新歓にてその団体の様子をすぐさま知ることができる。

③ 対面新歓の規制緩和

対面新歓の実施を許可する代わりに対象はオンライン新歓にて連絡先を交換した人のみにする。この方法により不特定多数が集まることを避け、人数の調整も可能である。また、新生に行動管理表の記入を求め感染者が出た場合でも、いつこのサークルの対面新歓に行ったか素早い把握が可能になる。サークル側としてもその団体に本当に興味を持っている人のみが集まるため効果的な新歓を行うことができる。

以上より、サークル・部活の全てが関わる全体新歓とサークル別に行う個別新歓をオンラインで行い、それを通して見つけた入りたい団体の対面新歓に行く新しい新歓方法を提案する。これにより、一年生もサークルも互いに満足できるサークルを選ぶことができると考える。



【謝辞】

本調査を行うにあたり、ヒアリング調査にご協力いただいた学生生活課学生支援チームの皆様、アンケート調査にご協力いただいた筑波大学 1, 2 年生の皆様、部活・サークルの代表者様、並びにご指導いただいた甲斐田直子先生、TAの御手洗陽さん、心より感謝申し上げます。

【参考文献】

岩田考(2014)「大学生の生活満足度の規定要因—全国 26 大学調査から—」『共同研究:「大学生」に関する総合的研究(Ⅱ)』
 蔵元健太・菊池秀夫[2006]大学の組織とスポーツへの参加動機に関する研究:体育会運動部とスポーツ活動参加者の比較 中京大学体育学論議 47,37-48
 佐々木 俊一郎・山根 承子・マルデワ グジェゴシユ・布施 匡章・藤本 和則(2018.3)「大学生の幸福度と学業に対する主観的評価:アンケート調査と学業データによる分析」『生活経済学研究』Vol.47
 (ひらく 日本の大学)オンライン授業、憤る学生 朝日新聞・河合塾共同調査
<https://www.asahi.com/articles/DA3S14575683.html>
 東京大学:高校生のための東京大学オープンキャンパス
<https://www.u-tokyo.ac.jp/opendays/entry.html#virtual>
 IUT
 (2020 年 12 月 16 日最終閲覧)
 cluster:バーチャル SNS cluster
<https://cluster.mu/>
 (2020 年 12 月 16 日最終閲覧)